

皆様新年あけましておめでとうございます。年が開けて間もない1月2日の礼拝にお出かけくださりありがとうございます。

昨年1年間の主のお導きと恵みに感謝し、新しい年も主を見上げ、待ち望み進みたいと願います。

主のあるお交わりを今年もよろしくお願い申し上げます。

さて今年の聖句は「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。」との御言葉にさせていただきました。

ヨハネの福音書には、水や飲み物、食べ物、パンという、これらの事柄が独特に表現されているところがあります。

今日の個所の前の所にも「生きた水」という言葉があります。これは井戸の水に対して泉の水と理解されたかもしれませんが、そうではありませんでした。イエス様は聖霊のことを指して語っておられました。

そして、「私にはあなた方の知らない食べ物がある」とどこかミステリアスな言葉があります。そしてヨハネ6章には私が命のパンであると語られ、54

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。

55 わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である。」という表現があります。日本で昔々、ザビエルたちが宣教師として遣わされ、聖餐式をしたときに、見慣れないパンとぶどう酒を見て、本当に人肉と血を食していると思われたという話を聞いたことがあります。カトリックでは、それを象徴としてではなくて、本当に血と肉としてとらえていますから、複雑ではありますが、イエス様は多くの比喩的な表現をなさっておられます。例え話で語られます。身近な事柄に例えて真理をお語りになります。

ヨハネ7章にもこのようにあります。

37 祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。

7:38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」

7:39 イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、“霊”がまだ降っていなかったからである。

たとえば真実を見るに鈍く遅い私たちに神様の真実を教える手段としてよく用いられました。結局のところ、私たちは、『人はパンだけで生きるものではな

い。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』(マタイ 4:4)という事を深く知るものでありたいと願います。そして、「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。」(ヘブライ 11:3)という事に心を止めておきたいと願います。

見えているようでも見落としていることが多いのですが、イエス様が、心に聖霊を注ぎ、まことの糧と飲み物となって下さり、私たちが心の底から飢え乾くことがないようにして下さり、「はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。

12:25 自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」ヨハネ 12:23-24 と、このようにおっしゃってください、多くの命のためにご自身の命を犠牲にして、私たちが悟り、救われ、豊かに祝福を受けることが出来るようにして下さいましたことに感謝したいと思います。

今日はこの有名なサマリアの女性の出来事です。紀元前 722 年北王国イスラエルの首都サマリアはアッシリアに占領され、多くの住民が別の町へと移住させられました。そして他民族がサマリアに移住させられ、サマリアに残された住民との結婚が行われ、サマリア人は人種的純粋性を失った混血民族となり彼らの礼拝は偶像礼拝に侵されてきました。その後南王国ユダもバビロン捕囚を経験しましたが、ユダヤ人は人種的純粋性を失いませんでした。それでユダヤ人はサマリア人を蔑視し、両者の対立と反目は根深いものとなりました。

ユダからガリラヤのほうに行く場合、サマリアを通るのが近道でした。最短コースだったのですが、多くのユダヤ人はこの平地に行く楽な道を避けヨルダン川を越えて溪谷沿いの険しい道を選びました。それはユダヤ人はサマリア人と付き合いをしていなかったと 9 節後半に書いてある通りでした。

そんなところイエス様はこの地を選んで通られたと言う事、それはこのサマリア人の女性に会うためであったかもしれませぬ。偏見のない新しい自由な心から出た行動でした。主の、福音の良い知らせを手渡そうとする情熱のゆえでした。

そこに昼の 12 時に水を汲んでいる女性がいました。灼熱のこの時にこの重労働である水汲みをする人はいませんでした。この女性は人目を避けて井戸の水汲みをしていました。それはなぜなぜだったのでしょうか。それはイエス様との会話の中で明らかになります。

ここで二人の会話がなされたことは二重の驚きでした。第一にユダヤ人がサマリア人に話しかける事はなかったですし、第二には、ユダヤ教の教師が女性に話しかけることもないことだったからです。

そしてそればかりか、この女性にとって最も気がかりである人目を避けてここに来なければならぬ理由についてイエス様は言い当てました。それは5人の夫がいて今連れ添ってるのは6人目だが夫ではないという事でした。この女性はそういう道徳的退廃の人でした。このことを言い当てられたこの女性は19節に言いました。

19 女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。

4:20 わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」

サマリアとユダヤとの間の深い壁と断絶があり、ユダヤの方からは取り合われてない自分たちの身の上を語るわけです。

すべてをお見通しの預言者という方が私たちのこのところに来られた。蔑視され反目の中にあって、この偶像の偽礼拝と偽の神殿とエルサレムから蔑まれるサマリアのこの山、ゲリジム山での礼拝は神様への礼拝ではないと思われていました。しかしそれでもこの女性は心に痛みを持ち、神様に分かってほしい、気付いてほしい、赦し、受け入れてほしいと思っていたに違いありません。

徴税人ザアカイも、マタイも、遊女の人もそうでしたけれども、過ちの道を走っていて人から蔑まれていても、なおその心に信仰心の欠片があってもどこかこのままではいけないと、神様が私に語りかけてくださるなら、やり直すことができるなら、その方法を見つけることができるのなら私は正しい行いをしたいのに、と思う人はおられるのではないのでしょうか。

自分一人の力では自分自身を支配する大きな力から助け出す事はできないのですけども、救い主が助けて、導き手が来てくれれば新たな人生を送ることができるのかもしれないのに、でもこの山ではダメだとエルサレムの人言うので私はどうしたら良いのか。私のような者が、この土地で、このように遍歴の中にあつた私が、礼拝を捧げることなんてできないのだろうかと思い、神様からもう一度受け入れていただく事はできるのだろうかと思ふ。これがこの女性の心の奥底にある1つの信仰の欠片のようなものでした。

21 節イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。

4:22 あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。

サマリアの人たちはモーセ五書(創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記)のこの五つのみを信じていました。ですからその後には預言書に記されて

いるイエス様の事を知りませんでした。多くのことを知らぬままに拝んでいます。ユダヤ人である私たちは知っている方を礼拝している。救いはユダヤ人から来ると主は語られました。

ユダヤ人から救いはやってくる。その通り、ユダヤ人であるイエス様から救いはもたらされました。

4:23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。

4:24 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」

サマリア人であり、預言書も知らないがゆえに救いから漏れてしまっているかのように思われるその人であったとしても、

23節「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。」

霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。エルサレムだから正しいとか、サマリアだから間違いだとか、物質としてのささげものが律法通りであればそれでいいという事ではなくて、霊と真理とをもって心の底からイエス・キリストの贖いに感謝して罪を悔い改めて礼拝を捧げる礼拝者たち、父なる神さまが求められる礼拝者たちが起こされる時が来る、今がその時だとイエス様は語られました。

物質的な捧げ物を捧げたところで心が伴わない礼拝、エルサレムの礼拝だから大丈夫、落ち度なく形式を整えればそれで良いと言うのではない、心の奥底から真実のの礼拝をするこの時、イエスキリストに頼って礼拝を捧げる時がやってくるのだから、恐れることはない。自分を蔑んで救われようがないと考えるなど主は語られました。

25 女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてください。」

このサマリア人の女性は、心深く自分の救いはどこからやってくるのかと待っていたと思われれます。あのこと、この事、うまく行かなかったこと、そういう事が、キリストの到来と共に、こんな自分でも、神様を見いだすなら、神様に見出されるならば、その方が来られて私たちに一切のことを知らせて下さるとの希望を持ち続けていました。

そして物の良し悪しも分からず、行ってはぶつかり、倒れ、失敗し蔑まれた自分が、このキリスト、救い主のもとでもう一回人生をやり直せると思っていました。そういう救いの時がやってくることを彼女は待っていました。

26 イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

女性は失敗と挫折の中、主を、救い主を、キリストを求め、ついに今キリストに出会ったのです。ギリシャ語では「エゴーエイミ」と書いてありますが、これは、「私、私こそが」という意味です。あなたと話をしている私がそれである。何という女性の喜びでしょうか。

私たちが尋ね求めるならば、神様に会うことが出来るという事を心に留めたいと思います。そして、ここでイエス様ははっきりとご自身が救い主であると語られました。

27 ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。

サマリア人と話すことはなく、しかもラビ(教師)が道端で女性と話をすることもなかったのですから、どうしたのかと思った弟子たちでしたが、主の深い思し召しに対してはあまり深く気に留めないで弟子たちでした。「この女性に何の御用があるのですか」「何を彼女と話しておられるのですか」と尋ねるのならば、この女性がサマリア人として不安の中、救いを求め続けていたことや、この女性が周りの人たちに顔を向けられない中でメシアを求めていたことなどが分かったかもしれませんが、弟子たちはそこまでの関心を持ちませんでした。

更に一步深掘りしようと思えば、イエス様の救いのご計画がわかったはずですが、イエス様こそがメシア・キリストであるそれを深く知る機会となったはずですが、弟子たちは突き詰めて深くそれを聞くことをしませんでした。

このあたりのことを弟子たちに示すためにイエス様はこうおっしゃいました。

31 その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、

4:32 イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。

一方でこの女性の喜びは爆発しています。

28 女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。

4:29 「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」

4:30 人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

その女性は水がめをそのままそこに置いて街に行きました。彼女は水を汲みに来たはずだったのに、水がめをそこに置いて街に行きました。彼女はその汲みに来た水よりも大事なものを見出したのです。

29 「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」

4:30 人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

これがあの蔑まれていたサマリアの女性の新しくされた姿でした。

「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。」という、その救いがこのサマリアの地に訪れようとしていました。輝かしい出来事が行われようとしていました。

正式な礼拝はエルサレムでしか捧げられることができない。清く正しく律法を守っている者たちの手によってのみ礼拝が捧げられ、救いはユダヤ人のものであると信じられていた救いが自分に開かれた。自分の目の前にメシアが現れた下さった。こんなにも蔑まれていた自分の前に。彼女はいてもたってもいられませんでした。

祭司、律法学者たちはこう祈っていました。「あの真理を知らない罪汚れたもののようなことを感謝します」しかし、こういう秩序が新しいものに取り替えられようとしていました。イエス様の地の贖いによる新しい礼拝への招きがなされたのです。

しかし女性との会話の中にあって弟子たちはこの旧来のしっかりとした秩序が脅かされているように思い不快に思ったことでしょう。この女性が帰っていったほっとしたのかもしれませんが。そして先生召し上がってくださいと話しかけます。主をお守りすることができるのは私たち。主を本当に理解しているのは弟子である私たちだけだと言う自負があったに違いありません。

:31 その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、

4:32 イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。

4:33 弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。

4:34 イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。

それが私の食べ物だ。失われた羊を尋ねてどこまでも行き、自らの命が注がれても構わない。それが私の生きる道だとイエス様はおっしゃいました。3食空

腹に駆られ、生きるために私たちは食事をとりますが、イエス様の心には、それに勝って苦しめる人たちを慰めて福音を語ることが生きる道なのでした。

それが私の生きる道だ喜びだ。「寝食を忘れて励む」という言葉がありますけれども、食べることよりも幸いなこと、それは魂の救いを求めている人たちとの出会いであり、その人たちに福音を語ることであり、私を信じなさい、私によって心の底から霊と真理、真実、まことによって礼拝をする者たちが続々と起こること。私とその罪ある人たちとの隔ての壁を打ちこわし、求めても求めても神様に至ることが出来ない絶望していた人たちに神様との新たな関係と安らぎと和解をもたらし、往来が起こるようになるために、主は進んでご自身を贖いのためにささげ、そのからだと血潮によって和解を成し遂げて下さいました。その体をまことのパンとしてささげ、ご自身がまことの飲み物となりて心の奥底の飢え渴きをいやして下さいました。

そのためにこの私がまことの飲み物、まことの食べ物、命のパンとなって十字架の贖いをなし救いを達成するから我がもとに来て私を通して礼拝しなさい。そしてそこからどんな人であっても、どんな過去があっても、どんな失敗があってもイエス様にあつて新たな礼拝の道が回復されるという事。その出来事こそが我が喜び。それこそが私を奮い起こし命を与える喜びを与えて生き生きと生活を支え起こす原動力となり、生きる源となるべきことなであり、そのために私は遣わされており、遣わされた方の御心を行いその御業を成し遂げること、このことを抜きには私は生きてはいけない、それが私の食べ物私の喜び私の命と生活の礎なんだとイエス様は語られました。

私たちはこの1年間どのようなことを目標にして何により頼み、計画し、何を土台として礎として生きていくのかそのことを教えられる思いがいたします。21「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。」

私が神学生であった時、アメリカで、私を救いに導いてくださった方の病気を知り、断食して祈ったことがありました。常に常に、自分の命を守るために私のからだは私に食べ物を得ることを訴えかけました。しかし私は、その訴えを常に感じるたびにそれを祈りの時と変えました。絶えず絶えず感じる空腹。しかしそれを祈りの時として祈り続けました。

イエス様がおっしゃいましたこと、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と、「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行

い、その業を成し遂げることである。」という御言葉から、イエス様がいかにご自身の身を軽んじて他者に仕えておられたかが分かります。

4:35 あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言うておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。既に、4:36 刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。

4:37 そこで、『一人が種を蒔き、別の人刈り入れる』ということわざのとおりになる。

4:38 あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実にあずかっている。」

そしてそのイエス様の贖いの功績によって罪ある人がメシアに出会い、狂ってしまった人生の航路が修復される恵みにあずかりました。そして主を礼拝する道が開かれました。

ヨハネ 6:35 イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。

ヨハネ 7:37 祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。

7:38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」

7:39 イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、“霊”がまだ降っていなかったからである。

ヨハネ 12:23 イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。

12:24 はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。

12:25 自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。



マタイ 4:4 イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』／と書いてある。」

聖霊によって導かれ、ご自身を一粒の麦のように捧げたイエス様によって種をまいて頂き、刈り入れられるばかりとなっている収穫があります。預言者たちが命を懸けて捧げてきた道でもあります。

これらは全て私たちが自らが蒔いたものではありません。神様がその命を一粒の麦として土に蒔いてくださったが故に得られる実です。私たちが労苦しなかったもの私たちは喜びながら刈り取るのです。その時に蒔いたお方も喜んでくださいます。共に喜ぶイエス様はこれから多くの魂が救いに進むためにご自分の身を喜んで捧げてくださいました。

そして私たちのためにこのイエス様の救いが成って、そして多くの人がイエス様によって神様のもとに立ち返るべき時が与えられています。

喜ばしい収穫の時を迎えています。私たちの目の前にはただ刈り入れを待っているばかりの喜ばしい出来事が待っています。私たちは偏見を捨てて、サマリアの地に進み出て、そして神様を待ち望んでいる方に、救いが分からずに喘いでいる方々にイエスキリストのことを伝えようではありませんか。

キリストと呼ばれるメシア・救い主が来られました。

その方がこられたならば私たちに一切のことを知らせてくださいます。心から悔い改めて霊と真理により神様を信じるならば、神様がその人を蔑まれる事はありません。今や救いの時、今や刈り入れの時。

私たちもまた先人が蒔いて育ててくださった方々と出会い、イエス様の御名を告げ、そして喜ばしく水がめを置いて人々に伝えに行く方と出会わせていただきたいのです。

喜んでこの方こそメシアです。素晴らしい方と出会いましたと証しをする方々との出会いを得させてください。それが我が食べ物なのです。そのように祝福と栄光ある主の僕としての務めに今年も携わらせていただきたいと願うのです。神様の溢れる救いの御心をお預かりして今年も遣わしていただきたいと願います。